



版画の技法 用語解説



版画はもととなる版に絵具やインクをのせ、紙などに写しとったものです。

版を作る方法(製版)は、版の素材の性質や、求める表現の効果によってさまざまです。

ここでは表面の形状(版形式)によって大きく4つに分け、簡単にご説明しましょう。

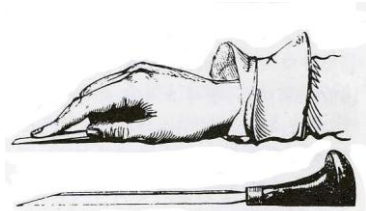
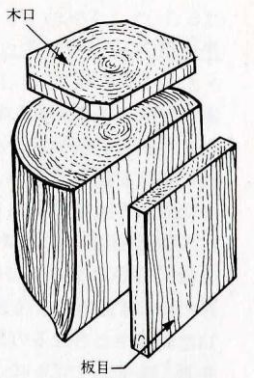
1 凸版(とっぱん)

線や面として表したい部分は彫らずに残し、その残した凸部(でっぱった部分)に絵具やインクを塗って、紙をのせ、バレンでこすったり(日本)、プレスで写しとする(西洋)方法。

◆ 木版画(板目木版・木口木版)

木を彫って版とする技法で、板目木版と木口木版の2種類がある。板目木版は、縦方向に切り出した木材を使い、木口木版では木材を横方向に輪切りの状態に切り出したものを使う[図1]。板目木版には桜、桂、朴、シナベニヤなどが使われ、木口木版には黄楊、椿など非常に目の詰まった堅い木が使われる。一般に、木版画といえば浮世絵などに代表される板目木版をさすことが多い。木口木版ではビュラン[図2/鋭い彫刻刀]で細かな線が彫り込まれ、緻密な描写となる。

▼[図1]



▲[図2] ビュラン

◆ リノカット

木のかわりに、ゴムや天然樹脂でできたリノリウムを彫る技法。繊細な描写には向かないが、おおまかで、勢いのある表現にはすぐれている。

2 凹版(おうはん)

線や面としてあらわしたい部分を、彫ったり腐蝕させたりして、溝やくぼみを作る。そこに、インクをつめて表面の余分なインクを拭きとってから、紙をのせプレス機で圧力をかけてインクを刷り取る方法。金属版(主に銅版、ほか亜鉛版など)が多い。

◆ 直刻法(直接彫って版に凹部を作る方法)

■ エングレーヴィング

ビュラン[図2/鋭い彫刻刀]で版を直接彫る技法。

■ ドライポイント

ニードル[図3/とがった針]やナイフなどで、版を直接引っかくようにして描画する技法。ビュランと違い、ニードルやナイフは刃を動かす方向が制限されないので、自由な線を描くことができる。また、金属を引っかいたり彫ったりすると、削りカスや、まくれあがった部分が彫った線の両側に残る。これを「まくれ」と呼ぶ。まくれについたインクは、独自のにじみを作って[図4]、深い調子の表現を生むことができるが、耐久性はないので、あまり多くの枚数は刷れない。

■ メゾチント

くし状の刃がついたベルソ(ロッカー)と呼ばれる道具[図5]で、版全体に細かい傷をつけて全面に「まくれ」を作る。この状態でプレス機にかけると、ビロードのような質感を持った黒に刷りあがる。「まくれ」を部分的に取りのぞいて磨き、さまざまな段階の明暗の色調を作りだして図像を描いていく。黒の微妙な階調が重要なので、フランス語では「マニエール・ノワール(黒の技法)」とも呼ばれる。

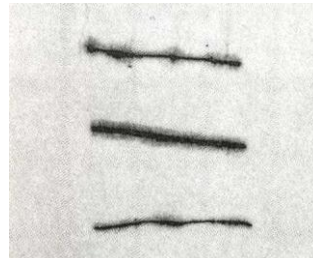
▼[図3] ニードル

▼[図5] ベルソ



▼[図4]

太くにじんだように見える部分が、「まくれ」によってできた特有のインクのたまり



**もうちょっと知りたくなったら、
読んでみてください!**

『版画の技法と表現』

町田市立国際版画美術館編

¥1,000 **好評販売中!**

ふしよく
◆ 腐蝕法 (酸で金属を腐蝕して版に凹部を作る方法)

■ エッチング

磨いた金属版にグランドという防蝕剤(松ヤニ、アスファルト、蜜ロウの混合物)をぬり、ニードル[図 3]で引くように線を描くとグランドがはがれ、線の部分だけ金属面が出てくる。この版を、酸の溶液(硝酸や塩化第二鉄)にひたすと、グランドがはがれた部分だけが腐蝕され、線状のくぼみができる。

■ アクアチント

版上に細かい点状の凹凸を作り、面的な濃淡で絵を描いていく技法。原版に松ヤニの粉末を付着させ、熱して定着させる。この原版を酸の溶液にひたすと松ヤニ粉の粒子がついていない部分が腐蝕される。松ヤニ粉を拭きとると金属版に無数の点状の凸部ができていく。この版にインクをのせて刷るとグレーの面に刷りあがる。部分的にグランドをひいて腐蝕時間を変えながら、明暗のグラデーションを作ったり[図 6]、筆でじかに腐蝕液を塗って、筆の動きを表したりすることができる。仕上がりは水彩画に似た効果になるので、「アクア(水)チント(淡彩)」と呼ばれる。

▼ [図 6] アクアチントのグラデーション

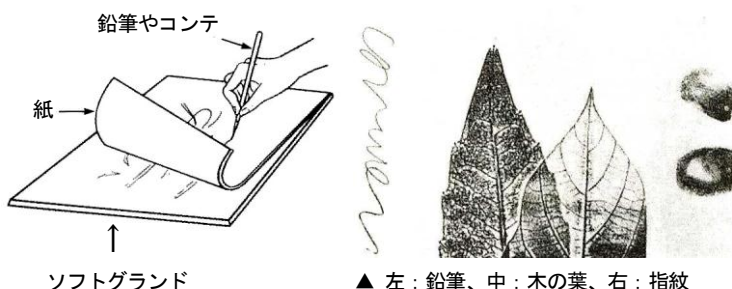
左から右へと腐蝕時間を長くしてきたアクアチントの濃淡



■ ソフトグランド・エッチング

グランド(防蝕剤)に獣脂などを加えて固まらないようにした柔らかい防蝕剤(ソフトグランド)を塗った版に紙をのせ、上から鉛筆やクレヨンなどで描くと、描線の部分のグランドが紙に付着してはがれる[図 7]。この版を腐蝕すると、鉛筆やクレヨンのタッチをそのまま生かした表現ができ、また木の葉やレース、指などを押しつけて実物の材質感を写しとることもできる。

▼ [図 7] ソフトグランド・エッチング



▲ 左：鉛筆、中：木の葉、右：指紋

3 平版(へいはん)

凸版や凹版のように版に凹凸をつけるのではなく、化学処理により、凹凸のない平らな面に、インクののる部分と、のらない部分を作って、転写して刷り取る方法。

◆ リトグラフ(石版画)

水と油が互いに反発しあう現象を利用する技法。高純度の石灰石に脂肪性のクレヨンやインクで描き、次に弱酸性溶液(アラビアゴムと硝酸の混合液)をぬると、化学変化によって描かれた部分は油性物質を強く引きつけ、描かれていない部分は水分を保持するようになる。こうして石面上に水分をはじく部分(油性物質を受け入れる部分)と、水分を保つ部分ができる。版面を水で湿らせてから印刷用の油性インクをのせると、描いた部分にのみインクが付着する。最後に、版の上に紙をのせて専用のプレス機で刷る。特殊加工した金属版も版として使われる。

4 孔版(こうはん)

版の孔(上から下へつき抜けた穴)を通して、インクを版の下に押し出して刷る方法。大きく分けて、ステンシル(合羽版)のように型紙を使うもの、謄写版のように蠟をひいた紙を使うもの、スクリーンプリントのように目の細かい布を使うものなどがある。版画技法の中で唯一、下絵や文字を反転せずに、そのまま刷ることができる。

◆ ステンシル(合羽版、ポシヨワール)

彩色したい部分を型紙から切り抜いて、その開口部から、絵具を刷毛で紙などへ写し取る技法。日本では合羽版、西洋ではステンシル(フランス語ではポシヨワール)と呼ばれる。

◆ スクリーンプリント

四角形の木製(あるいはアルミ製)の枠に布(当初は絹、そのためシルクスクリーンともいう。現在は化学繊維)を張り、その布に様々な手法でインクが通過する部分と通過しない部分を作り、スキージというヘラでスクリーン上をこすって、インクを版の下へと押し出し、その下に置いた紙に付着させる。版画の技法としては比較的歴史が浅く、20世紀に入ってから盛んになった。